opusdei.org

聖ホセマリアの生涯 -66

いつも活発で愉快だったカルメンが、元気がなくなりました。検査をした結果、がんでした。1957年3月のことです。医師たちはあと二ヶ月の命だと宣告しました。

2024/12/02

過去の記事はこちらから

聖ホセマリアの姉カルメンは、オプス・デイのメンバーからティア・カルメン (カルメン叔母さん) と呼ば

れています。1952年、カルメンは神 父に頼まれて海辺の農家を研修会の 家にするためにローマに来ました。 この仕事は一年で終わりましたが、 その後も彼女は弟のサンチアゴと一 緒にローマで家を借りて住むことに しました。

ここで過ごした4年間がカルメンの 一生で最も幸せな時期となりました。弁護士として働くサンチアゴの 世話をしながら、家を訪れる甥や姪 (オプス・デイの男女のメンバー) との団らんを楽しむこともしばしば でした。家では犬や鳥を飼い、庭に は花やイチゴを栽培しました。

甥や姪が来ると、お菓子やケーキを ご馳走し、彼らの健康に配慮してい ました。ローマでの研修を終えて外 国に行く人には、思い出となる品を よく渡していました。もう二度と会 うことはないだろうと思うと、 「せっかく知り合って仲良くなった のに。こんなのだったら、もう誰と も知り合いたくないわ」と漏らすこ ともあったそうです。

いつも活発で愉快だったカルメンが、元気がなくなりました。検査をした結果、がんでした。1957年3月のことです。医師たちはあと二ヶ月の命だと宣告しました。それから数日待って、ドン・アルバロがカルメンに告知しました。彼女は落ち着いて取り乱すことなく告知を聞きました。

聖ホセマリアは苦しみました。神の 御旨を尊重しながらも、聖櫃の前 で、ときに嗚咽しながら姉の治癒を 祈りました。オプス・デイ全体が のために祈りました。しかし、奇 は起こりません。6月19日、神父は 姉に病者の塗油の秘跡を授けまし た。祈りの途中感動で嗚咽し、そ にいたドン・アルバロに交替 にいました。

その翌日の午前2時半カルメンは息 を引き取りました。遺体を整えて、 日の出とともに神父はミサを捧げ始 めました。もちろん、姉の霊魂のた めに。しかし、ミサの中で死者のた めに祈る箇所で、姉のことを思い出 さなかったのです。これは普通あり 得ないことです。師はこのことを通 して神様がカルメンはすでに天国に いることを教えてくださったと考え ました。その日、「カルメンが死ん だ時点で、私の涙は枯れてしまっ た。今は主が彼女を連れて行ってく ださったことを感謝している」と 言っています。

pdf | から自動的に生成されるドキュメント https://opusdei.org/ja-jp/article/sei-josemaria-66/(2025/12/17)